

## 祭火の礼拝

著者	笠松 直
号	19
学位授与番号	264
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/37059">http://hdl.handle.net/10097/37059</a>

かさ  
笠

まつ  
松

すなお  
直

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 264 号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 文化科学専攻
学位論文題目	祭火の礼拝 —Maitrāyaṇī Saṃhitā I 5, 1-14 訳注研究—
論文審査委員	(主査) 教授 後藤 敏文      教授 桜井 宗信 教授 鈴木 岩弓 准教授 吉水 清孝

## 論文内容の要旨

### 0. 目的

祭火礼拝儀礼は元来、インド・イラン宗教儀礼の中核をなすものと考えられる。ヴェーダ祭式は祭火を中心に営まれ、ゾロアスター教は、一般に「拝火教」と呼ばれることがあり、祭火の礼拝を重んじる。祭火の礼拝はインド最古の文献リグ・ヴェーダ(R̥g-Veda, B.C. 1200年頃に現在伝えられる形で伝承が固定されたと考えられる)以前に遡り、後代の密教の護摩にまで連なる伝統の中にある。

ヤジュル・ヴェーダ(Yajur-Veda, YV)諸学派は、B.C. 1000年頃から順次祭式を整備しつつ、文献を編集していったものと考えられる。礼拝に用いる祝詞(mantra)を定めその効果を述べ、祭式議論や起源説話を伝える。果報として意図されるのは死後の存続、子孫繁栄・家系の継続、財産獲得、敵対者の圧倒などである。各文献が共通に使用する祝詞も多いが、使用順や意義付けを違えるなど、差異も多い。他学派の説に言及しつつ、自派説の優位を述べるものと思われる箇所も存する。諸学派は相互に意識しあってそれぞれの式次第を形成し、順次文献に纏めていったものと考えられる。これらの文献の規定は、祭式の組織化、発展の過程を反映するものであるが、この間の事情は未だ解明されていない。

本論文は、最古層に属すると思われる文献、マイトラーヤニー サンヒター(Maitrāyaṇī Saṃhitā, MS)に収録されている「祭火の礼拝」章(第1巻第5章)を取り上げ、文献学的検討を行うものである。該当箇所のmantra集成及びブラーフマナ(brāhmaṇa, br.: mantraの解釈、祭式の解釈と式次第に関する議論、論証を内容とする)部分全体のテキストを確定し、精密な逐語訳並びに注解を行う。さらにこ

れに基く考察を各章ごとに提示する。この際、他学派文献の関連箇所との比較考察を行い、「祭火の礼拝」章に即したヴェーダ諸文献形成史及び「祭火の礼拝」儀礼形成・展開の事情を考察する。

結論としては、MSはカータカ・サンヒター (Kāṭhaka-Saṁhitā, KS) と極めて緊密な関係を持つことが論証できる。多数の mantra を共有し、使用する順序も似通うほか、単語・構文レベルでの並行現象も多数確認される。祭式議論や祭式にかかわる起源説話にも共通点が顕著であり、相互に相手学派の説を参照、採用している箇所も指摘できる。

なおこうした検討に際して確認された注意すべき語形・語法、祭式解釈上の問題、文化習俗に関する知見はその都度個別に検討、注記した。各 mantra は全ヴェーダ文献及びシュラウタスートラ (Śrauta-Sūtra、祭式儀軌文献。後述) における出典を調査し、可能な限り個々の祭式の文脈を確定し明記した。

本論文の構成は以下の通り：

- 0. 総論
- I. MS I 5 のテキスト、翻訳の提示
- II. 各章別考察
- III. YV 各派「祭火の礼拝」関係 mantra 対照表

## 1. 本論文が対象とするヤジュルヴェーダ文献について

ヤジュルヴェーダ・サンヒター (Yajurveda-Saṁhitā, YS) は、祭式の中で所作の実行を担当する Adhvaryu 祭官が唱える mantra と、それを巡る br. とを軸に構成される。一般に、mantra 集成部分が先行して成立し、br. の成立までには編集年代差が存したものと考えられる。両者間に齟齬が見られることがあるが、これは編集年代差とその間の学説の発展を反映するものと考えられる。これらの点は本論文の範囲でも数箇所指摘することができる。

YS は編集方法の違いから 2 派に大別できる。

「黒ヤジュル・ヴェーダ」と呼ばれる一群は、mantra 集成と br. 部分とを一つの文献に編集することを特徴とする。マイトラーヤニー サンヒター、カータカ・サンヒター及びその姉妹学派カピシュタラ・カタ・サンヒター (Kapiṣṭhala-Kāṭha-Saṁhitā, KpS. 実際上 KS に準ずるため、必要のない限り特に注記はしない)、さらにタイッティリーヤ・サンヒター (Taittirīya-Saṁhitā, TS) がこの一群をなす。

これに対し、白ヤジュル・ヴェーダ派は mantra 部分を、ヴァーージャサネーイ・サンヒター (Vājasaneyi-Saṁhitā, VS) に、br. 部分をシャタパタ・ブラーフマナ (Śatapatha-Bṛāhmaṇa, ŚB) に、別々に編集する。ŚB は黒 YV における議論を意識している点が看取され、内容は革新的である。

YV のうち、KS の学派を除く MS、TS、VS の学派には、祭式行作の細かな規定を述べる儀軌文献、シュラウタスートラが現存している。br. は mantra の解釈と議論、起源説話を主軸とし、具体的動作に言及することは少ない。マイトラーヤニー サンヒターは、何れの祭火を礼拝すべきかさえ指示しない (MS I 5, 14 を例外とする)。祭式の実態を知るには、成立年代の遅さや細目の不一致が認められるにも関わらず、シュラウタスートラの伝える情報を参照せざるを得ない。

本論文においては、MS 学派所属マナーヴァ・シュラウタスートラ (Mānava-ŚrautaSūtra, MānŚS) ・ヴァーラーハ・シュラウタスートラ (Vārāha-ŚrautaSūtra, VārŚS) に必要に応じて言及している。本稿の範囲では、パウダーヤナ・シュラウタスートラ (Baudhāyana-ŚrautaSūtra, BaudhŚS) は自派聖典 TS

にほぼ完全に忠実であって、TSの意図する儀礼を再構成するに当たって極めて有用である。

TS学派所属のアーパスタンバ・シュラウタースートラ (Āpastamba-ŚrautaSūtra, ĀpŚS)「祭火の礼拝」章は、CALANDの翻訳 (Das Śrautasūtra des Āpastamba. Göttingen—Leipzig 1921, Amsterdam 1924, 1928) の注釈部分が個々に指摘するように、自派聖典に存しないMS乃至KS由来の mantra を多数採用している点で特異である。

## 2. 先行研究

「祭火の礼拝」の先行研究としては J. GONDA の The Mantras of the Agnyupasthāna and the Sautrāmaṇi が挙げられる (Amsterdam—Oxford—New York 1980)。GONDA は考察に当たって、主として VS や成立年代の下る諸派シュラウタースートラに拠っており、黒ヤジュルヴェーダ・サンヒターへの注意は十分でない。シュラウタースートラの記述は、その所属学派の mantra 集成部分—br. 部分の正確な理解に基いて位置付けられなければならない。

TS には A. B. KEITH による全訳がある (The Veda of the Black Yajus School entitled Taittiriya Sanhita, 2 vols. Cambridge, Mass. 1914)。P. D. NAVATHE による KS の Agnihotra 章部分訳には「祭火の礼拝」の mantra, br. 部分も含まれる (P. D. NAVATHE, Agnihotra of the Kaṭha Śākhā. Pune 1980)。MS については、K. SAKAMOTO が MS I—II 巻の br. 部分について訳注研究を行った (Die Maitrāyaṇi-Saṁhitā I—II. Dissertation Freiburg 2000/2001)。これには「祭火の礼拝」章も含まれるが、mantra 部分を含まない。KASHIKAR が中心になって刊行中の Śrautakośa は、BaudhŚS を軸に各文献の対応する記述を集成しており、ヴェーダ文献並びに祭式研究に便宜を与える。先学の諸成果を基盤に、全 YV 学派の祝詞集、br. の記述を改めて検討し、各学派が儀礼を形成してゆく過程や祭式思想の展開を、その初期段階から明らかにする研究が可能な状態にある。

さらに近年 K. HOFFMANN, J. NARTEN, Ch. SCHAEFER, T. GOTÔ, H. HETTRICH, S. SCARLATA, M. KÜMMEL、堂山英次郎、E. TICHY を始めとする研究によってヴェーダ語の文法研究が進展した。これらの成果を文献の精密な理解に生かすべきである。西村直子『放牧と敷き草刈り —Yajurveda-Saṁhitā 冒頭の mantra 集成とその brāhmaṇa の研究—』(2006 年、東北大学出版会) はこうした状況における先駆的業績である。

## 3. マイトラーヤニー サンヒター「祭火の礼拝」章の研究結果の要旨

### 3.0 MS「祭火の礼拝」章の構成とその内容

- MS I 5, 1-4 「祭火の礼拝」に用いられる mantra の集成
- MS I 5, 5 Agnihotra に伴う、献供用祭火 (Āhavanīya) への晩の礼拝 (使用 mantra は→MS I 5, 1)
- MS I 5, 6 祭火設置から一年毎に行う Gārhapatya (「家長に属する」) 祭火への礼拝 (→MS I 5, 1)
- MS I 5, 7 晩の祭火礼拝義務と客人接待義務；《早朝の手洗い》儀礼
- MS I 5, 8 Āhavanīya 祭火に対する晩の礼拝 (→MS I 5, 2)
- MS I 5, 9 Āhavanīya、夜・昼、牝牛たちへの礼拝 (→MS I 5, 2)
- MS I 5, 10 Gārhapatya 祭火への礼拝 (→MS I 5, 3)
- MS I 5, 11 Āhavanīya 祭火への礼拝；敵対者を圧する呪文；天空地と諸方角への礼拝 (→MS I 5, 4)
- MS I 5, 12 祭式議論、夜の創出説話と諸韻律による家畜の確保
- MS I 5, 13 Vāstospati「居住地の主」への献供 (mantra, br.)
- MS I 5, 14 旅行出立・帰宅時の祭火礼拝 (mantra, br.)

MS「祭火の礼拝」章に対する各 YV 対応箇所は以下の通り<sup>1</sup>：

KS	KpS		MS	TS	VS/ŚB
VI 9	IV 8 #	mantra	I 5, 1-4	I 5, 5-6	VS III 11-36
VI 10-11# <sup>2</sup>					
VII 1-2	V 1: 2 (前半)	br.	I 5, 5-12	I 5, 7-9	ŚB II 3, 4
VII 4-10	V 3-9#				
		V.P. 献供	I 5, 13	III 4, 10	
VII 3	V 2 (後半)	旅行時 <sup>m</sup>	I 5, 14 #	I 5, 10a-f	VS III 38-40
VII 11	VI 1	旅行時 <sup>p</sup>		BaudhŚS III 13-14	ŚB II 4, 1, 3-14

- 1 表中の略号のうち、V.P. 献供は Vāstoṣpati 献供 (mantra 部分 + br. 部分) を、旅行時<sup>m</sup>は旅行時の礼拝 mantra 部分を、旅行時<sup>p</sup>は旅行時の礼拝 br. 部分を意味する。記号 # は、各章末に当たることを示す。
- 2 KS VI 10-11<sup>m</sup> は「祭火の礼拝」儀礼に無関係である。KpS はこの部分の並行を欠いており、この 2 節を VI 巻末に置くことについては KS 独自の事情があったものと推察される。

### 3. 1 「祭火の礼拝」章編集の問題

MS I 5, 1-4 の mantra とその br. 部分 I 5, 5-12 とは「祭火の礼拝」章の中核部分をなすものと考えられる。各 YS が一致して並行部分を伝えており (KS VI 9; VII 1-10, TS I 5, 5-9, VS III 11-36; ŚB II 3, 4)、「祭火の礼拝」章の中で最も古く編集された部分と考えられる。黒 YS の場合、この部分の最後には祭式議論・起源説話を述べる箇所が配置されており、全体を締め括ったものと考えられる (MS I 5, 12, KS VII 10, TS I 5, 9)。

MS I 5, 13 及び 14 は、I 5, 1-12 と異なり、一節中に mantra と br. とが纏めて収められている。

MS I 5, 13 は家族を連れて定住地を去る際に行う Vāstoṣpati「居住地の主」への献供を扱う。KS に並行記述は見られない。TS は、並行部分を持つものの (TS III 4, 10)、中核部分 (TS I 5, 5-9) から離れた位置に孤立して編集する。明らかに中核部分より編集が遅れた追加部分であり、KS はこの部分を聖典化しなかったものと考えられる。

MS I 5, 14 は旅行に出発する際、及び帰宅する際に行われる祭火礼拝を扱う。冒頭に mantra を掲げ、続く br. 部分は使用する mantra とその効果の逐語的解釈、論証を述べ、Āhavanīya、Gārhapatya 祭火、或いは Dakṣiṇāgni (祭場の南 *dakṣiṇa*-に位置し、祭官への布施 *dakṣiṇā*-を調理する祭火) のうち何れを礼拝すべきか、mantra 毎に指定する。これは本節の著しい特徴であり、寧ろシュラウターストラに近似する。本節は MS「祭火の礼拝」章中核部分及び Vāstoṣpati 献供部分より、さらに一段遅い時期に編集されたものと考えられる。KS は旅行に出発する際に用いる mantra を「祭火の礼拝」mantra 集成末尾に、br. 部分を「祭火の礼拝」章 br. 末尾に配置する。TS は、mantra 集成を TS「祭火の礼拝」章直後に置くものの、その br. を欠く。実際の運用は BaudhŚS III 13-14 から推測される。

### 3. 2 「祭火の礼拝」とアグニホートラ

アーリア人の家長たる者は祭火を設置せねばならない (Agnīādheya、祭火設置祭)。祭火設置後、祭火を設置した者 (*āhitāgni*-) は一生、Agnihotra (毎晩・朝に祭火をおこし、熱したミルクを献供する祭式) を行う必要がある。「祭火の礼拝」は、この晩の Agnihotra に直接引き続いて行われるものであり、独立の祭式ではない。

Agnihotra に用いる mantra は、(ソーマ祭に行われる) 詠唱 (*stóma*-) を欠いている。詠唱を欠いていれば、それは祭式ならざるものである。詠唱が繋がれば、その者の Agnihotra は天界に到るものとな

るとbr. は主張する。「祭火の礼拝」は、RV由来の韻文mantraを多く含み、これらは地上と天界を連結する効果があるとされる(MS I 5, 5)。祭主は諸韻律を用いて天界に向かうことになる(MS I 5, 10)。

讃歌の詠唱はヤジュルヴェーダではなく、サーマヴェーダ学派の職掌である。MS(乃至KS)「祭火の礼拝」章のbr. 部分が、サーマヴェーダ学派の流れに属することが確かめられる学者Aruṇa Aupaveśi(KS並行箇所では、その息子Uddālaka Āruṇi)の説に言及、これを採用するのは、詠唱の使用を巡ってサーマヴェーダ系統の学者がYajurveda学派「祭火の礼拝」儀礼形成に関与した事情を反映するものと考えられる(MS I 5, 8; KS VII 6. 8. 9)。

なおMS I 5, 5(br.)の意図するmantra配列は、MS I 5, 1(mantra部分)ではなく寧ろKS VII 4(br.)の記述順にはほぼ一致する。これに対し、KS VII 5(br.)の予定するmantra配列順はMS I 5, 1(mantra部分)冒頭のそれに一致する。これらを偶然の一致と見做すことはできない。MS—KSは相互に、相手学派の学説の動向を注視しており、場合によっては相手方の学説を採用することがあったものと推測される。但しそのことは明言されることはない。

### 3. 3 「祭火の礼拝」と客人接待義務、《早朝の手洗い》儀礼

晩の祭火礼拝が祭主の義務であることは、全学派共通の了解事項である。KS及びMSはその理由を晩の客人接待義務と関連付ける(KS VII 5; MS I 5, 7)。晩には、家長は客人に対して接待すべき責務を負っており、祭火を礼拝せねばならない。ここで祭火は、晩に祭主宅にやってくる客人と見做される。しかし早朝には接待義務はなく、祭火礼拝も行わない。

これに対してMSは新説を唱える。早朝には、義務によらず、家長に福德を齎すことから(*pūṇyavāt*)客人に物を与える。これと同様、MSは早朝のAgnihotraの際に祭火が「礼拝されるべきだ(*upasthēyas*)」と規定する。他派説では想定外の早朝の礼拝によって、獲得された事のない果報が得られると主張した。これが《早朝の手洗い》(Prātaravanega、諸ŚrSūはPrātaravanekaの語形で伝える)儀礼である(MS I 5, 7)。

先行訳は*pūṇyavāt*を「善意に基いて」「任意に」と理解した。これに応じて、朝の礼拝も任意に行われるものと理解されたが、この見解は原典からは読み取り難い。

《早朝の手洗い》はMS独自の説であるが、同派所属Vārāha-ŚrautaSūtraのみならず、Taittiriya派所属学派も採用する。ヴェーダ期の「祭火の礼拝」儀礼形成史上、MSが特別な位置を占めていた可能性が示唆される。

### 3. 4 祭火の更新：祭火設置後一年毎に行うべき「祭火の礼拝」

YS諸派は祭火を家畜と同置し、牛馬、人間と同様、年老いるものと述べる。そこで、祭火設置から丸一年が経つ度に、特別の礼拝を行い、祭火を更新せねばならない。MS I 5, 6はこの祭火更新儀礼を取り扱う。12ヶ月(さらに「十三」月、閏月)を象徴するmantraを用いて礼拝すると、祭火を更新し、再び若くすることになる。

本節に關説するMaitrāyaṇi派所属のMānava-ŚrautaSūtra I 6, 2, 4を根拠に「祭火の礼拝」は、そもそも年一度行えば良い、任意の儀礼であると主張する見解が存するが(GONDA, op.cit. p.8 n.10; HEESTERMAN, Broken World of Sacrifice, p.103)、原典の正確な理解に立つものではない。本儀礼は毎日の祭火礼拝儀礼とは性質を異にする。

なお、MS I 5, 1末尾の2 mantaは一切br.、ŚrautaSūtraに言及されず、その使用が規定されない。そ



もそも使用されることのない mantra が収録されたとは考え難い。これは mantra 部分の編集から br. 部分形成までの間に、式次第の革新があったことを示唆する。

### 3.5 Vāstoṣpati 献供

MS 及び TS は Vāstoṣpati 「居住地の主」に対する献供に一節を割く。両派によれば、家族・家財と共に移動生活を行っている際、ある場所に十晩留まるならば、そこは居住地 (*vāstu-*) と見做される。これは古い、移動生活を前提とする観念である。Vāstoṣpati 献供を聖典化しない派があるのは、生活様式の変化を反映するものと考えられる。

Agni と同置される Vāstoṣpati 即ちルドラ神は、適切な献供によって鎮められない場合、家長を追跡し、これを殺すことになる。Vāstoṣpati 献供は、居住地を出立する際に行われ、崇り神を鎮めることを目的とする。この点、子孫繁栄などの積極的効果を期待する「祭火の礼拝」中核部分と異なる文脈にある。

MS は、荷車の役畜を全て繋いだ後に行うべきとし、TS は祭火脇に置く荷車の 2 頭の役畜のうち、右側を繋いだ後、左側を繋ぐ前に献供すべきとする。他に役畜を繋がないうちに行うとする説も伝えられ、両派は以上 3 説に言及した上で自派説を主張する。恐らく MS、TS とも、相手方の説を知った上で批判、却下しているものと思われるが、文献自体に明証はない。

## 論文審査結果の要旨

古代インドの宗教儀礼は祭火を中心に営まれる。祭火そのものの礼拝には、印欧語族以来の古い部族慣習を引き継ぐ要素が想定される。複雑に構成された祭式群中に隠れているが、宗教史、部族や社会のあり方の解明に重要な鍵を握る。本論文は同儀礼用讃歌集と、議論を集めた散文文献とを広く精査した上で、最古層を含む標記の文献部分（前 800 年頃に遡る）の理解を軸に分析を加えた。

本論文は、原典の読みの確定、翻訳、分析の三部からなり、総計約 290,000 字になる。讃歌集は初めて現代語訳された。散文部分は比較的最近の独訳、英訳中に含まれているが、本論文は正確さにおいてこれらを凌ぐ。祭火儀礼そのものの研究としては断片的な言及があったに過ぎない。論文は高度な専門知識を前提とすべく呈示されているが、達成された知見は信頼できるものであり、文法、語彙、事項に亘る高水準の注記と相俟って、今後の研究に基礎資料を提供するものである。

讃歌の基本部分は第 1 巻第 5 章第 1 節（全 17 讃歌）に求められる。中 15 讃歌は、二つの祭火に対して複数の仕方で用いられる。まず、8 讃歌が毎晩のアグニホートラ（熱した牛乳を献供火に注ぐ簡単な儀礼）に引き続いて用いられ、これを補完する（第 5 節）。次いで、祭火設置後一年の経過毎に執行される祭火若返りの儀礼に、家長火に対して用いられる（第 6 節）。末尾の 2 讃歌が用いられない裏には編集史解明のヒントが隠されている。第 7 節は晩に礼拝を行う理由付けと、朝の礼拝を巡る議論、第 5 節への補論を収める。 — 第 8 節は別の讃歌群（第 2 節）中の 9 讃歌を用いる晩の献供火礼拝儀礼を題材とし、献供火の賞讃に止まらず、願望、要求の内容を含む。Manu の息子たちが異母兄弟間で争う話、当時の学匠の呪術に関わる逸話などが興味深い。第 9 節は第 2 節第 10–31 讃歌を用いる各種の祈りを収め、重要な学匠のことが引かれる。 — 第 10 節は一転して家長火への礼拝を論じる。第 3 節所収の 13 讃歌が用いられる。第 11 節は、第 4 節全 15 讃歌を予定して、さらに願望成就の色彩の強い礼拝を論じる。第 12 節は特定の讃歌集を予定しない議論の集成である。伴侶を失ったヤミーを慰めるために夜が創出される説話は特に注目される。 — 第 13 節は構成を異にし、始めに議論が、節末に使用讃歌が収録される。

移住生活時代に居住地を去る際の祭火礼拝を内容とする。最終第14節は、旅行の出発と帰還とに際して用いる讃歌集、および、議論である。部族長たる武士階級(王)が祭主としての役割を増してきた社会背景を伺わせる要素を含む。後続文献において王族起源の説として語られる「五火二道説」の形成に寄与した3祭火の礼拝が注目される。

このような内容の確定も本論文が初めて明らかにした成果であり、今後の研究の基礎となる着実な検討結果が呈示されている。ヴェーダ祭式を専門とする研究者を越えて、広く知られる価値のある内容を扱っているだけに、公刊する場合には、背景の説明にも頁を割き、成果を直截に利用することができるような体裁の工夫が求められるが、学術論文としては十分に水準を超えたものであり、本論文の提出者は「博士(文学)」の学位を受けるに値するものと判断される。

## 目 要 の 内 容